

防災に関する道外視察研修レポート

議員氏名 宗 形 一 輝

- 1 視察先 岩手県遠野市
- 2 調査事項 沿岸被災地後方支援
- 3 所感（意見・課題・当町への反映など）

（１）遠野市 沿岸被災地後方支援について

①稲荷下屋内運動場の視察

普段は市民がゲートボールやサッカーのスポーツを楽しむ施設となっており、1209 m²の人工芝で整備されていました。

被災時は延べ 50 日で 1700 名もの方が物資の仕分けをし、各地から届く支援物資の中継地として、ここから沿岸沿いに物資が送られたと説明を受けました。ここではトラクターで物資を搬入し、市が日頃から付き合いのある商店からついで物資を購入し、被災者に日用品を無料で配るスーパーマーケットを開き、1 時間 10 品制限で配分されたようです。場所は住宅街の中にあり、物資の配達が大変そうなどころにありましたが、中標津町というシルバースポーツセンターとほぼ変わらない建物となっていました。

中標津町においても物資の搬入・仕分けをする場所としてシルバースポーツセンターが活用できると思いました。シルバースポーツセンターと同様に暖房が入っていないととても寒かったです。



稲荷下屋内運動場

②遠野運動公園の視察

被災時に陸上競技場や多目的広場等 4 区画を臨時ヘリポートとし開設し、球場、軽スポーツ広場を自衛隊（車両 600 台・隊員 1800 人）や警察（車両 100 台・隊員 300 人）、他地域の消防（車両 100 台・隊員 800 人）の活動拠点として開放されました。ここから各被災地に向けてヘリ等を使い救助活動をしていくことになりますが、防災のために何かを設置するのではなく、あるのものを活用していくとして、市単独で



遠野運動公園

整備された施設は被災前から計画していた防災センターのみとのことでした。

中標津町としても緊急時に運動公園を開放し、同様の活動をしていくのに十分な面積があると考えられます。

③遠野市の沿岸被災地後方支援～縁が結ぶ復興への絆～について

後方支援を可能にした背景として盛岡市—花巻市（いわて花巻空港）—奥州市と縦に東北自動車道が通っており、ここから東へ50kmほどに遠野市があり、さらに東へ行くと海岸沿いの大槌町、釜石市、陸前高田市があります。西側から集結し展開していく流れができています。



遠野市の果たすべき役割として当時9市町村（現在は合併により8市町）が参画し、平成19年に三陸地域地震災害後方支援拠点施設整備推進協議会を設立し、同年、岩手県防災訓練として自衛隊等が参加し（参加機関87、参加人数8746人）三陸沖地震を想定とした訓練、平成20年みちのくALERT2008として運動公園を実際に使って訓練をしました。

被災後は遠野市としても震度5強で庁舎が全壊し、中にも入れなくなったため、庁舎前でテントを張り災害本部を立ち上げたそうです。

また、沿岸沿いの大槌町からの助けを求めに来た方のお話や、屋内運動場での救援物資の仕分け、炊き出しのおにぎりのお話しなどを伺いました。

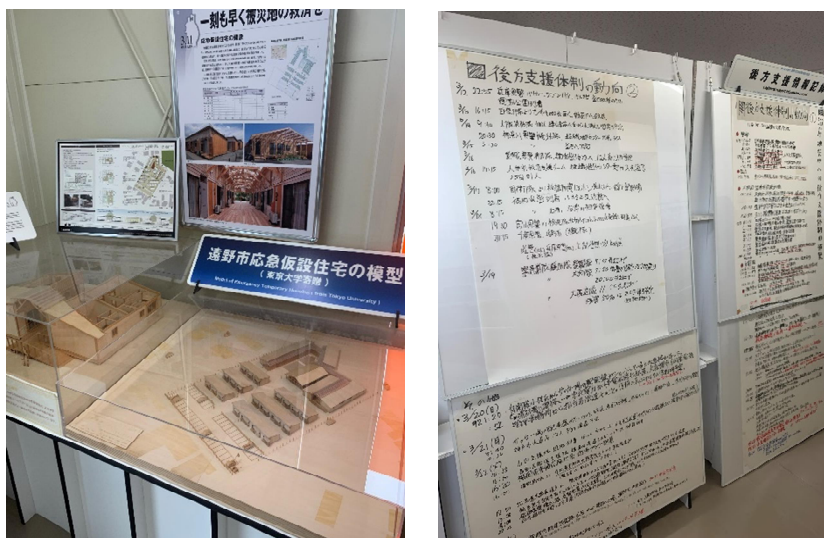
当時の本田市長が中心となって危機感を持って活動したからこそ、結果があるのだと感じました。

視察前、岩手県はどのようにこの沿岸沿いの地域を支援していたのかと思いましたが、説明された担当者は、岩手県との連携はあまり効果的なものではなかったと話していました。訓練までは協力体制にあったようですが、本来、地域の市町村をまとめて調整していくはずの都道府県を、あまり期待しすぎるのは混乱を招く可能性があると思いました。よって、遠野市のように町村自治体を中心となって計画を立てて、被災時に備えていく必要があります。

④遠野市後方支援資料館の視察

当時の記録としてパネルやジオラマ模型、被災時に災害本部が使用した手書きの記録模造紙が展示されていました。被災時の会議に実際に役に立つのは、紙とペンで記録して見やすくするのが早いと説明がありました。参加いただいた小松総務常任委員長は、遠野まごころネットの代表で市民ボランティアの派遣を行っており、役所の人間だけではボランティアをさばくことが人員的に難しいことなど資料を

用いて当時の様子を説明して頂きました。



後方支援資料館展示物

防災に関する道外視察研修レポート

議員氏名 宗 形 一 輝

- 1 視察先 岩手県陸前高田市
- 2 調査事項 東日本大震災における消防の活動状況
- 3 所感（意見・課題・当町への反映など）

被災前と被災後の写真を見比べながら当時の状況を振り返り、市民約 1700 人、その中に消防職員 1 人、消防団員 34 人が殉職されたそうです。事前に 1 m の浸水想定で訓練していたそうですが、15m まで大津波が押し寄せるとは思わなかったそうで、旧消防庁舎屋上からの写真、動画で津波が町を浸水していく様子、建物が衝突し壊れていく様子、旧消防庁舎 3 階まで浸水していく様子があり、説明された方が「これは私です。（撮影者）」と言った時には驚きました。旧消防庁舎の 3 階の屋上にある鉄塔につかまり、自衛隊のヘリにより救助されたとのことでした。



陸前高田市消防防災センター

被災時、我々はどのような動いたらいいのかと考えたとき、陸前高田市議長の話で、まずは何より「自分の命を守れ」ということでした。当時の議員で、正義感が強く津波の心配をしていた 2 人の議員が高台に避難したにも関わらず、市民を助けるために戻り亡くなったそうです。とにかく自分の安全を確保してくれとの言葉は、とても重たく感じました。被災後の救助活動では、瓦礫の下から住民が発見されたこともあったと説明されました。ガソリンや灯油などの確保がとても大変で、ドラム缶がないため法律上はやってはいけませんが、緊急的にポリタンクで運搬したそうです。

地震災害活動マニュアルでは「津波浸水区域内で広報・避難誘導は原則行わない。やむを得ず津波浸水区域際付近で広報・避難誘導する際は、高台へ続く退避路を必ず確保するとともに、津波予想到達時刻 10 分前には、予め分団で定めた避難場所に必ず退避を完了する。」とあり、職務はあるけれども、自分の命を守らせるということが大事だと思いました。浸水した現地を確認すると、防波堤は完成したようですが、そこにあるのは道の駅・東日本大震災津波伝承館のみで、あとは何もない土地でした。震災の凄まじい現実を未だに物語っていました。



奇跡の一本松